

確認要求は増えているか

— 江戸・東京の推量形式を中心に —

白 岩 広 行

1. はじめに

筆者は本誌前号の白岩(2015)で江戸・東京の話しことばにおける推量形式の通時的な意味変化について考えた。その概要は2節に示すが、江戸期の推量形式は「命題についての推量」を表す性格が強く、推量用法、および、推量しながら聞き手に確認する命題確認用法で主に使われていたものと考えられる。その後、時代が下るごとに、既知のことを確認する知識確認用法の例が増えてゆき、推量というより「聞き手への確認」を表す性格が強くなっている。つまり、話しことばにおける推量形式の意味が「推量」から「確認要求」を表すものに大きく変わりつつあるものと見られる。

しかし、この変化は意味的なものであるため、客観的な分析がおこないにくい。白岩(2015)では一定の基準を立てて個々の用例の分類をおこなったが、意味による分類であるため、必然的に客観性の欠ける面があった。そこで、本稿では、この意味変化と連動していると考えられる形の面の変化について示す。具体的には、(1) 確認要求になりえない非文末での生起頻度の減少、(2) 後接する終助詞の種類・頻度の減少、(3) 「だろ」「でしょ」などの短呼形の使用、の3点について指摘する。これらは形の面から確認できることであり、「誰がやっても同じ結果になる」という手法上の客観性を担保することができる。

また、この意味変化に関連して、推量形式にかぎらず、確認要求の発話自体が増えている可能性が考えられる。例えば、土岐(2002)は、推量形式の確認要求用法での使用が増加していることを指摘し、その要因として、対人指向の発話全般が増えている可能性を示唆している。

近代以降の、対人指向の機能を担う言語形式の需要の増大が、会話での「だろう」の用法を、推量から確認要求へと変容させてきたと考えられる。(土岐2002:197)そこで、ジャンナイカ、ヨネ、ネをふくめた確認要求表現全般の使用頻度の推移についても分析をおこなう。

以下、本稿では、2節で白岩(2015)の内容を簡単にまとめ、推量形式の「確認要求は増えているか」を確かめるため、3節で形の面の変化を示す。さらに、会話の進め方全般の傾向として「確認要求は増えているか」を4節で考えることとする。

2. 白岩(2015)の概要

2.1 推量形式の諸用法

ダロウ、デショウなどの推量形式には複数の用法が認められる。

(1) この分だと、たぶん明日は雨だろう。

【推量】

(2) これ、君のペンだろう？

【命題確認】

(3) ほら、あそこに信号があるだろう？

【知識確認】

推量用法は、(1)のように命題（その文のダロウより前の部分で表される事態）の真偽を推量するものである。命題確認用法は、(2)のように命題の真偽を推量しつつ、その答えを知っているはずの聞き手に確認するものである。知識確認用法は、(3)のように既知の事実をとりあげて確認するものである。知識確認用法の文の命題は話し手にとって既知の事実であり、推量の余地はない。同じ知識を持っていることを聞き手に確認するというのが知識確認用法である。

3つの用法の関係性を、筆者は次の図のように整理した。つまり、「命題についての推量」をおこなうという点では推量用法と命題確認用法に共通点があり、「聞き手への確認」をおこなうという点では命題確認用法と知識確認用法に共通点がある。一般に「確認要求」といわれるのは命題確認用法と知識確認用法をあわせたものである。

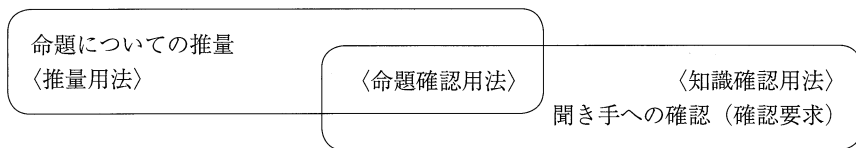


図1 本稿で分析の前提とする用法間関係性（白岩2015:59）

このような用法間関係性は多くの論者が指摘しており、宮崎（2005:105-108）が整理するように、現代語の共時的な分析では、推量用法を本来的なものと見なし、「推量用法→命題確認用法→知識確認用法」という順に用法が派生してゆく流れが盛んに論じられている。

ところで、これらの用法はダロウにかぎらず、「よかろう」などというときのウ、否定推量のマイ、過去推量のタロウ、丁寧体のデショウも共通して持っている。また、これら複数の推量形式は、各時代で、述語の品詞、極性（肯否）、時制、丁寧さに応じて、おおむね相補的に使い分けられている。例えば、江戸期の資料でダロウが使われるのは、形容詞述語以外の非過去・肯定の場合にほぼ限られており、形容詞述語ではウ、過去時制の場合にはタロウ、否定の場合にはマイが主に使われている（これはすでに知られたことだが、筆者の調査としては白岩2015:50-49参照）。そのため、ダロウという一形式だけでなく、相補的に使われる諸形式をあわせてあつかったほうがよいと判断し、本稿では、ウ、マイ、タロウ、デショウをふくめた複数の形式を「推量形式」と呼んで一括する（ただし、ウについては意志・勧誘用法のものを除く）。

また、疑問詞と共起した「誰だろう」や終助詞カと共起した「行くだろうか」のような例は「疑い用法」として他の用法と区別した。この用法は「基本的に聞き手への問いかけを意図することなく話し手の判断成立への疑念を述べたもの（仁田1991:44）」であり、一定の見込みを持つ「推量」でも聞き手への「確認要求」でもない。本稿の議論の中心にはしないが、疑い用法の例についても集計をおこなっている。

2.2 用法面の通時的变化

白岩 (2015) では、土岐 (2002) など先行の論をふまえつつ、共時的な視点から想定される「推量用法→命題確認用法→知識確認用法」という派生関係を通時的な変化として捉えた。

具体的には、江戸期の戯作を出発点として現代にいたるまでの大衆的な文芸作品を対象とし、その会話文にあらわれた推量形式がどの用法で使われているかを集計した。調査対象とした個々の作品については白岩 (2015:56) の表を参照されたいが、具体的には以下の作者の作品を選んでいる¹。

山東京伝 (各種洒落本)、式亭三馬 (浮世風呂)、為永春水 (春色梅児譽美)、梅亭金鷲 (七偏人)、饗庭篁村 (各種短編)、永井荷風 (すみだ川、新橋夜話、腕くらべ)、久保田万太郎 (各種短編)、幸田文 (流れる、北愁)、向田邦子 (寺内貫太郎一家)、浅田次郎 (各種短編)、三浦しをん (まほろ駅前多田便利軒)

用例の実数については白岩 (2015:54) の表を参照されたいが、各作品の会話文の文末に生じた推量形式について、「推量」「命題確認」「知識確認」の各用法での使用頻度の割合をグラフ化したのが図2である (疑い用法の例については除いている)。

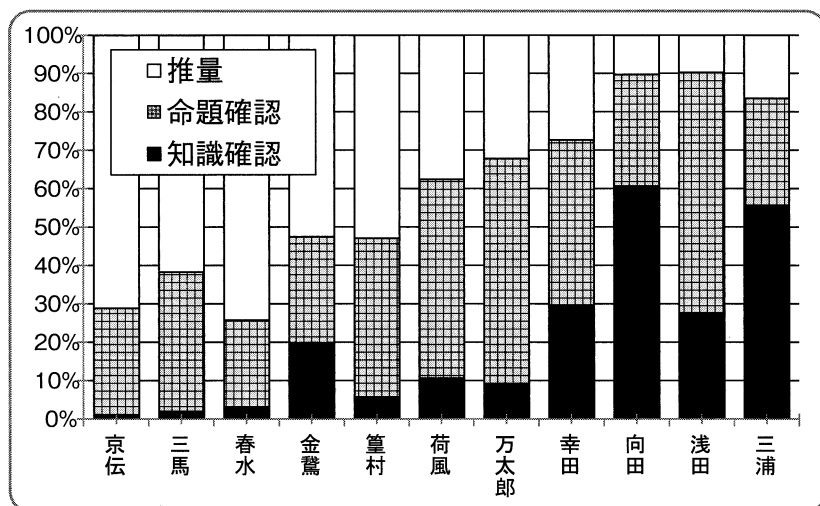


図2 推量形式の用法の変化 (白岩2015:54)

この図に見るとおり、会話文の文末における推量形式の使用は「推量用法+命題確認用法」を主としたものから「命題確認用法+知識確認用法」を主としたものに大きく変わっている。図1に示した枠組みでいうと、江戸期の推量形式が「命題についての推量」を表すものだったのに対し、現代の推量形式は「聞き手への確認」という談話的な性格を非常に強めているように考えられる。

3. 形の面での変化

2節にまとめた白岩（2015）では、「命題についての推量」から「聞き手への確認」へと推量形式の意味変化について論じた。このような意味変化が生じていることを裏づける形の面の変化として、本節では、(1) 確認要求になりえない非文末での生起頻度の減少、(2) 後接する終助詞の種類・頻度の減少、(3) 「だろ」「でしょ」などの短呼形の使用、の3点について指摘をおこなう。

3.1 非文末での生起頻度の減少

白岩（2015）では推量形式が文末に生じた例にかぎって分析をおこなった。それは、「…だろうと思う」「…だろうから」のように非文末に生じた場合、確認要求という談話的な意味は成立しえず、必ず推量用法のものとして解釈され、そもそもの用法かということが問題にならないためである。

表1 推量形式の生起位置の変化

	山東 京伝	式亭 三馬	為永 春水	梅亭 金鷲	饗庭 篁村	永井 荷風	久保田 万太郎	幸田 文	向田 邦子	浅田 次郎	三浦 しをん
作者生年	1761	1776	1790	1821	1855	1879	1889	1904	1929	1951	1976
文末	148	191	92	192	110	119	136	199	174	133	120
引用節内	3	11	17	30	17	1	23	17	0	6	6
C類従属節内	6	28	30	20	27	9	3	35	9	9	2
計	157	230	139	242	154	129	162	251	183	148	128

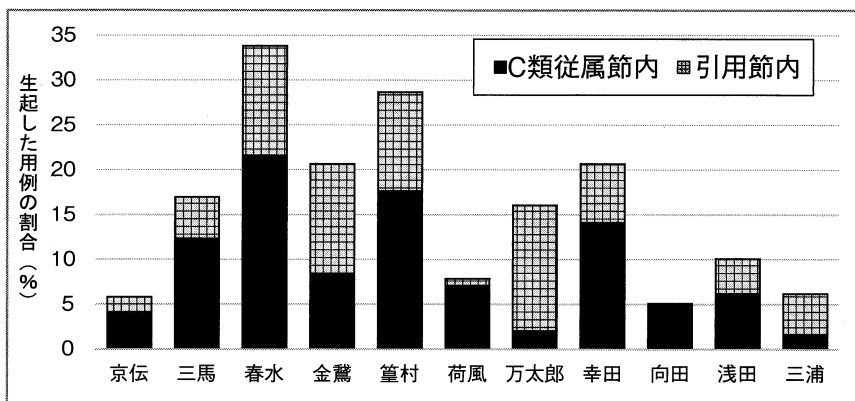


図3 推量形式の生起位置の変化

ただし、非文末の生起例をふくめて集計すると、年代が新しいほど非文末に生起すること自体が少ないように見られる。各作品の会話文を対象に、文末に生起したもの、「…だろうと思う」のように引用節内に生起したもの²、「…だろうから」のようにC類従属節内（南1993）に生起したものの3つに分けて、推量形式の使用数をまとめたのが表1である。また、全用例のうち文末以外に生起した例の割合をグラフ化したのが図3である。

この図表を見ると、作品によって相当のばらつきはあるものの、おおむね新しい作品ほど非文末に生起した例が少ない³。短絡的に結びつけてはいけませんが、確認要求の用法で使う傾向が強まったことにより、確認要求という読みが成り立たない非文末では、推量形式が生起すること自体が少なくなっているという見方もできる。

3.2 後接する終助詞の種類・頻度の減少

土岐（2002）は、現代のダロウ・ウの使用が確認要求用法に偏ることを指摘したうえで、江戸期にくらべ、現代のダロウ・ウに後接する終助詞の種類と頻度が減少していることを示している。そして、「様々な終助詞の持つニュアンスを許容し得るものから、特定の文脈の中で現れるものへ、という推量形式の質的な変化を示唆しているものとして解釈出来る。(p.195)」と述べている。つまり、確認要求という特定の談話の意味を強めたことにより、共起する終助詞が減ったということである。

これをふまえ、本稿では、田野村（1994）の整理を参考に、終助詞の後接状況についてまとめる。田野村（1994）は、江戸語・現代語に共通する終助詞の承接関係を下のよう整理し、ワ・サ・ゾ・ゼ・カの各終助詞をA類、ヤ・イ・エ・ヨの各終助詞をB類、ナ・ネ・ノの各終助詞をC類と名づけている。「わいな」という終助詞の連鎖が許されるように、A類よりB類、B類よりC類のほうが承接関係の後ろに位置することになる。

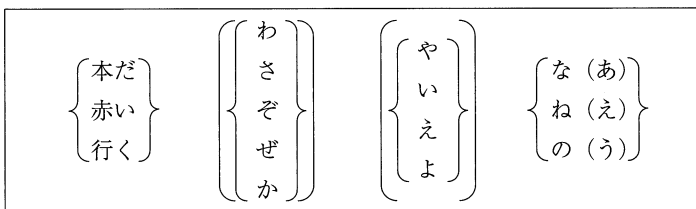


図4 終助詞の承接関係（田野村1994:95より）

{ } は、その中に記された要素のいずれか一つが選択されること、
[] は、その中の要素を選択することなく素通りできることを表す

この整理をもとに、文末に生起した推量形式について、終助詞が後接していないもの、各類の終助詞が後接しているものの数を示したのが表2である。なお、A類のうち、カは推量形式の疑い用法に関わる点で特別と考え、別個に集計している。また、ス、トモ、ガ、ジャンイカなど、田野村（1994）にない終助詞は「その他」としている（ス

は江戸期の終助詞。ガは「さっき言ったろうが」のような例のガ。戦前までの作品にある「さっき言ったろうじゃないか」のような例のジャナイカは、文末で談話的意味を持つため終助詞にふくめた)。各終助詞の後接した例の割合をグラフ化したのが図5である。

表2 推量形式に後接する終助詞の変化

	山東 京伝	式亭 三馬	為永 春水	梅亭 金鷲	饗庭 篁村	永井 荷風	久保田 万太郎	幸田 文	向田 邦子	浅田 次郎	三浦 しをん
作者生年	1761	1776	1790	1821	1855	1879	1889	1904	1929	1951	1976
終助詞なし	108	129	56	148	92	89	98	161	150	111	105
A類終助詞後接	5	7	4	7	0	1	2	1	1	0	0
B類終助詞後接	4	18	0	2	4	2	0	2	4	0	0
C類終助詞後接	21	12	19	10	4	18	7	21	14	7	8
終助詞カ後接	7	12	6	10	8	8	22	14	3	6	6
他の終助詞後接	3	13	7	15	2	1	7	0	2	9	1
計	148	191	92	192	110	119	136	199	174	133	120

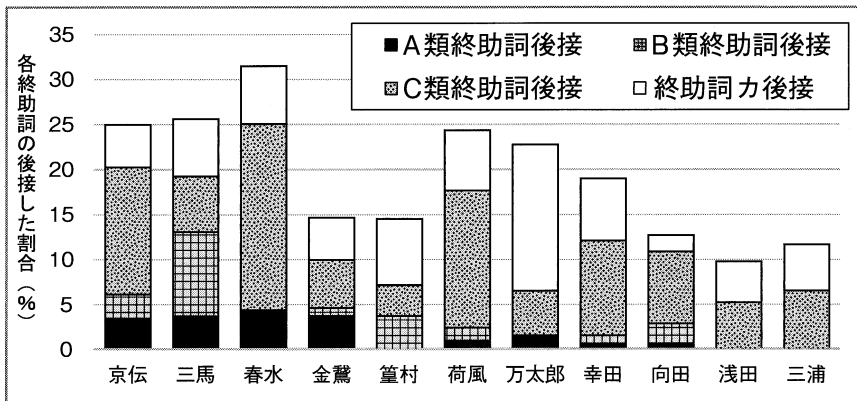


図5 推量形式に後接する終助詞の変化

この図表に示すとおり、江戸期の作品ではA～C類の別を問わず、様々な終助詞が推量形式に後接している⁴。一方、現代の作品では、後接する終助詞がC類（現代の作品には見られないため、実質的にはナとネ）およびカに、ほぼ限られるようになっている。終助詞の後接する頻度も、おおむね時代が下るごとに減少している。

個々の終助詞の特性を考慮して分析する必要がある、単純には結びつけられないが、これも推量形式の意味変化と関係している可能性がある。4節で示すように、C類の終助詞ネ（およびナ、ノ）は確認要求の用法を持つ。まったく同じ意味ではないにしても、推量形式がネと同じような確認要求の意味を表すとすれば、C類より前に位置するA類・B類の終助詞が推量形式に後接しにくくなるのは自然なことである。つまり、図4で考えるなら、確認要求という談話的な性格を強めるとともに、推量形式の占める位置がA類の前あたりからB類の後ろあたりに変わってきているという見方ができる。

なお、終助詞カの後接した例は幸田以降の戦後の作品に計29例見られたが、そのうち26例はデショウカ、2例はゴザイマショウカという例であった。戦後の作品の会話文では、終助詞カの後接した例は「丁寧体の推量形式+カ」という固定的な表現にほぼ限られるものといえそうである。

3.3 短呼形の使用

現代の作品には、「ダロ」「デショ」のように、末尾の1拍分をつづめた推量形式が見られる。

(4) 「証拠がないんだったら、たとえ死体が出たとしても、俺やおまえが名乗りを挙げる必要はないだろ」

「まほろ署のオマワリサンは、あんたたちを疑ってる。いらぬ探りを入れられるまえに、真犯人が自首したほうが、あんたたちにとって得でしょ」

〔三浦しをん『まほろ駅前多田便利軒』(2006) p.314〕

本節では、ダロウ、デショウ、タロウに対応したダロ、デショ、タロ、あるいはウについて「ヨカロウ」に対応した「ヨカロ」のように、1拍短形を「短呼形」、ももとの長い形を「長呼形」と呼ぶことにする。短呼形は、今回対象とした資料を見るかぎり、その推量形式が文末に生起し、終助詞が後接しない場合にほぼ限って使用されている⁵。この環境で生起した推量形式について、短呼形と長呼形の使用状況をまとめると表3のようになる。

表3 長呼形／短呼形の使用数（文末生起・終助詞非後接の場合）

	山 東	式 亭	為 永	梅 亭	襲 庭	永 井	久 保 田 万 太 郎	幸 田	向 田	浅 田	三 浦 し を ん
	京 伝	三 馬	春 水	金 鷲	篁 村	荷 風		文	邦 子	次 郎	
作者生年	1761	1776	1790	1821	1855	1879	1889	1904	1929	1951	1976
長呼形	108	125	56	148	92	89	98	44	24	67	32
短呼形	0	4	0	0	0	0	0	117	126	44	73

式亭三馬の短呼形の例は4例とも形容詞ヨイにウのついたヨカロという例。

短呼形の使用について、通時的な変化という視点の分析はしにくい。久保田万太郎までの戦前の作品は歴史的仮名遣い、幸田以降の戦後の作品は現代仮名遣いで書かれているためである。歴史的仮名遣いの「だらう」や「でせう」という表記から「だろ」「でしょ」のような短呼形の表記は生まれにくい。幸田以降の作品における短呼形の突然の出現は、推量形式の変化を示すものではなく、単に仮名遣いの変化に連動したものと捉えられる。

ただ、短呼形が頻繁に使われること自体、現代における推量形式の意味を反映したものととも考えられる。つまり、確認要求という談話的な意味で使われやすいために、同じく談話的な意味を持つ各種終助詞と同様、短い語形になりやすいものと見なされる。例えば、次の4節で挙げるデハナイカも、確認要求用法ではジャンという短い形が使われやすい(ジャンの正確な語源は不明だが、デハナイカの確認要求用法をカバーするのは事実である)。そのほか、確認要求に関わるネ、ヨネ(あるいは西日本諸方言のガなど)も、語形の短い終助詞である。推量形式についても、確認要求という意味的な特徴が短呼形の使用につながっていることは十分に考えられる。

なお、幸田以降の作品で用法別に長呼形／短呼形の使用数を集計すると、やはり確認要求(命題確認・知識確認)の用法では短呼形の使用頻度が高いようである。

表4 用法別の長呼形／短呼形の使用数(幸田以降:文末・終助詞非後接の場合)

	推量	命題確認	知識確認	疑い	分類せず
長呼形	37	55	46	20	9
短呼形	28	145	164	8	15

文脈が不明瞭でどの用法とも判別しがたいものを「分類せず」としている。

4. 確認要求表現全般の増加について

推量形式の命題確認用法はデハナイカ・ネ・ヨネ、知識確認用法はデハナイカ・ヨネといった他の形式によっても表される(三宅1996、宮崎2005など参照)。本節では、これら確認要求表現全般の出現頻度について考える。

(5) さてはお前、昨日徹夜 {しただらう／したんじゃないか／したね} ?

(6) 今度の飲み会、お前も来る {だらう／ね／よね} ? 【以上、命題確認】

(7) ほら、あそこにポストがある {だらう／じゃないか／よね}。 【知識確認】

各作品の会話文について、話の冒頭から順に1000の発話文を対象に⁶、これらの確認要求表現が何回現れているかを示したのが表5である。推量形式、デハナイカ、ネ、ヨネの各形式について、確認要求用法で使われたと筆者の判断した例の数を集計した。それを命題確認と知識確認の2つに大別してグラフ化したのが図6である。

作品ごとに話の筋が異なるため単純な比較はできないが、大きな傾向として、推量形式以外にデハナイカの使用数も増加しており、確認要求表現全体の使用頻度が増えていることがわかる。量的な変化だけではなく、それまでなかった形式として、戦後の資料では新しくヨネが加わっている⁷。

表5 確認要求表現の1000発話文内の使用数

		山東 京伝	式亭 三馬	為永 春水	梅亭 金鷲	饗庭 篁村	永井 荷風	久保田 万太郎	幸田 文	向田 邦子	浅田 次郎	三浦 しをん
作者生年		1761	1776	1790	1821	1855	1879	1889	1904	1929	1951	1976
命題 確認	推量形式	16	13	7	19	20	29	12	25	20	42	11
	デハナイカ	0	0	3	0	0	2	1	4	7	2	6
	ヨネ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5	1
	ネ	1	4	0	2	2	7	3	5	2	3	3
知識 確認	推量形式	0	1	1	9	4	5	0	15	30	16	22
	デハナイカ	4	3	19	7	5	14	30	12	30	19	5
	ヨネ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計		21	21	30	37	31	57	46	61	90	87	48

デハナイカにはデハゴザイマセンカなど、コピュラによる他の否定疑問形式およびジャンの例をふくむ。ヨネにはヨナ、ネにはナ・ノの例をふくむ。

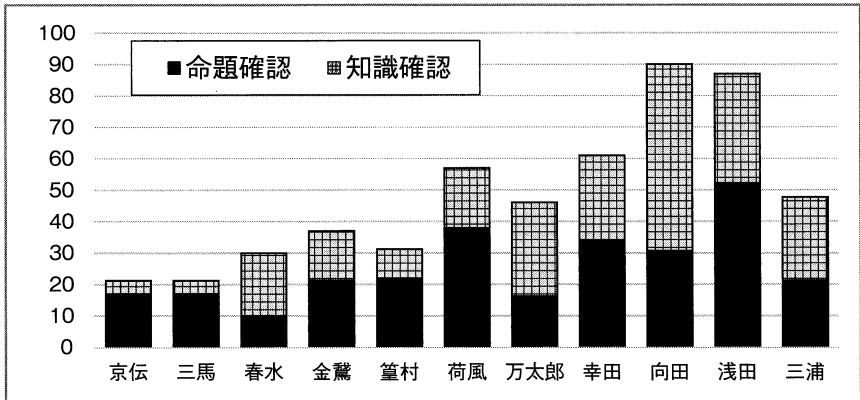


図6 冒頭から1000発話文内の確認要求表現の使用数（文芸作品）

ただし、文芸作品の場合、確認要求表現の使用頻度が各作品のあらずじ、登場人物の属性などに左右されていることも考えられる。そこで、同じ話の筋を持つ資料として、古典落語の口演資料等でもこの傾向を確認する。具体的には、比較的によくの言語量が確保できる演目「文七元結」について、時代の違う江戸・東京出身の5人の落語家の口演資料等を対象に調査した。表6の各資料について、演者自身の地の語りを除き、登場人物どうしの会話文を対象に、発話文の総数と確認要求表現の使用数をまとめたのが表7である。演者ごとに発話文の総数が異なるので、1000発話文あたりの

数字に直して確認要求表現の使用数をグラフ化したのが図7である。

表6 調査対象作品（落語資料「文七元結」）

演者	演者生年	使用テキストの出典
初代三遊亭円朝	1839	『三遊亭円朝全集4 芝居噺・一席物』（角川書店1975）
二代目三遊亭円馬	1854	『演藝画報 明治版22（復刻版）』（不二出版1988）
五代目古今亭志ん生	1890	『五代目古今亭志ん生全集』（弘文出版1977）
三代目古今亭志ん朝	1938	『志ん朝の落語2 情はひとの…』（ちくま文庫2003）
立川志らく	1963	『落語は最高のエンターテインメント』（講談社2004）

円朝・円馬は速記資料、志ん生・志ん朝は録音の文字起こし資料である。立川志らくのみ、口演でなく小説として書いた体裁をとっている。

表7 確認要求表現の使用数（落語資料）

演者		円初 朝 代	円二 代目 馬 目	志五 ん代 生 目	志三 ん代 朝 目	志ら く
演者生年		1839	1854	1890	1938	1963
命題 確認	推量形式	4	6	5	18	8
	デハナイカ	0	0	1	2	1
	ヨネ	0	0	0	0	2
	ネ	0	1	4	9	8
知識 確認	推量形式	0	1	2	9	20
	デハナイカ	10	3	15	38	6
	ヨネ	0	0	0	0	1
確認要求表現の総数		14	11	27	76	46
発話文の総数		428	303	482	1080	666

表5と同様、デハナイカ、ヨネ、ネには、同類の否定疑問形式・ジャン、ヨナ、ナ・ノをふくむ。

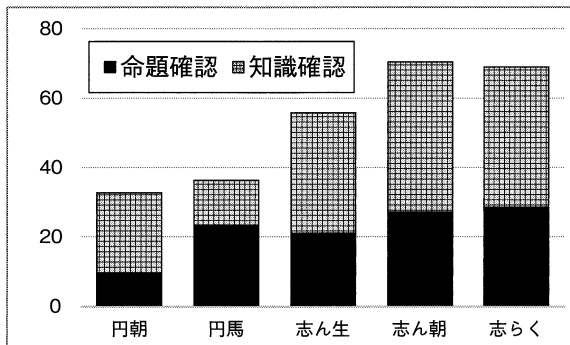


図7 確認要求表現の1000発話文あたりの使用数（古典落語資料）

図7に示すとおり、同じ演目を演じる場合でも、生年の若い落語家ほど、登場人物どうしの会話で確認要求表現を多く用いて話を進める傾向がある。下の例は、店の金を失くして川に身投げしようとする奉公人に主人公の男が金を出す場面である。(8)の円朝では確認要求表現が出ないのに対し、(9)の志ん朝はセリフに確認要求表現を挟みつつ演じている。このような会話の展開の違いが上の図表で示した数的な変化につながっているようである。

(8) 「(前略) 金ずくで人の命は買えねえ、おれもなくっちゃあならねえ金だが、おめえに出っわたのがこっちの災難^{せえなん}だから、これをおめえに……だが、どうか死なねえようにしてくんなあ、え、おう」 [円朝 資料p.408]

(9) 「(前略) やりたかアねエけれども、おめえが金がねエってエと、どうしても死ぬってエから、おれアやるんじゃねエかア、ンつとうに (と憤ったが男の疑念を察し)……てめえ…、俺のことを胡散^{うまん}に思ってやアんな。おれがからっかってると思ってんだろ、ええ? (後略)」 [志ん朝 資料p.432]

以上、これだけのデータで結論を出すわけにはいかないが、江戸期から現代にかけて、確認要求表現全般の使用頻度が増えている可能性が考えられる。つまり、聞き手への確認を頻繁にとる会話の進め方が志向されるようになってきたと考える。とすると、1節で挙げた土岐 (2002) の示唆どおり、推量形式の意味変化は、会話の進め方の変化という、より大きな流れの中に位置づけることができるかもしれない。

5. まとめ

本稿では、白岩 (2015) で考えた「命題についての推量」から「聞き手への確認」へという推量形式の意味変化に関連して、以下のことを示した。

(a) 推量形式の形の面での変化

(a-1) 非文末での生起頻度の減少 / (a-2) 後接する終助詞の種類・頻度の減少

(a-3) 「だろ」「でしょ」などの短呼形の使用

(b) 確認要求表現全般の増加

(a) は「聞き手への確認」へという意味変化と連動した形の面の事象として、そのような意味変化が起こっていることの傍証になりうる。(b) については、その意味変化が会話の進め方の大きな変化の中に位置づけられる可能性を示している。推量形式の意味に関しても、会話の進め方全般の傾向としても、「確認要求が増えている」という推測はできるであろう。

ところで、本稿では各種の推量形式を一括してあつかったが、すでに知られているとおり、ウやマイの使用頻度は時代が下るごとに減少している (筆者の調査結果としては白岩2015:49の表4・表5を参照)。この事象も上記の意味変化に関連づけうる。「聞き手への確認」という談話的な意味を持つということは意味的に終助詞に近いといえるが、終助詞はウのように述語の活用をとまなうこともないし、マイのように述語の極性 (肯否) を複合的に表すこともない。談話的な性格が強まるのと並行して、終助詞的な性格にそぐわない形態的特徴を持つウやマイも使われにくくなったものと捉えられる。

一方、述語の活用をとまわず、他の文法的意味を複合的に表すこともないダロウは、文末以外にも生起しうるとはいえ、形態的には終助詞に近い。ダロウという形式が生まれ、使用の範囲を広げたこと自体、談話的意味へという推量形式全体の意味変化と連動しているといえるかもしれない。

この点については、鶴橋（2013）が示唆に富む調査結果を示している。詳しい数字は注3・注4に示したが、江戸期の資料で動詞についてとダロウの形態的な特徴を比較すると、(1) 非文末での生起頻度が少ない、(2) 終助詞の後接する頻度が低いという特徴はダロウのほうに顕著である。ダロウという形式が、その成立当初から、談話的な意味を担いやすい特性を持って生まれたということは考えられる。現在の筆者の手持ちのデータでは、そこまで精査する準備はないが、ダロウ、ウ、マイ、タロウ、デショウといった各形式間の違いについても、検討の余地は大いにある。

以上、荒削りな面が多いのは自覚のうえだが、前号の白岩（2015）に引き続き、推量形式の通時的な意味変化に関連して見られる言語事象のいくつかを示した。

付記

本稿は科学研究費補助金（特別研究員奨励費）「現代諸方言に見る推量形式の用法変化—（認識）から（伝達）へ—」（平成19-21年度）による研究の一部をまとめたものである。筆者は歴史的な言語資料のあつかいに不得手な面がある。江戸・東京語、および落語に詳しい方からのご批評をたまわりたいと考える。

参考文献

- 白岩広行（2015）「推量形式の用法の通時変化について——江戸・東京の文芸資料をもとに——」『上越教育大学国語研究』29 上越教育大学国語教育学会、pp.60-49
- 田野村忠温（1994）「終助詞の文法——江戸語資料に見る終助詞の体系性——」『日本語学』13-4、pp.94-112
- 鶴橋俊宏（2013）『近世語推量表現の研究』清文堂出版
- 土岐留美江（2002）「「だろう」の確認要求の用法について」『日本近代語研究』3 ひつじ書房、pp.183-200、pp.94-112
- 仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 南不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 三宅宏知（1996）「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89、pp.111-122
- 宮崎和人（2005）『現代日本語の疑問表現——疑いと確認要求——』ひつじ書房
- メイナード、泉子・K（1992）『会話分析』くろしお出版

1 白岩（2015）では説明を省いたが、(a) 明らかに前後の発話と言い回しの違う発話（講談調になった発話など）、(b) 江戸・東京以外の方言的特徴が顕著な登場人物（『浮世風呂』に登場する上方出身者など）の発話、(c) 発話文内に引用された他の発話、(d) 独話・心内発話は対象から除外している。また、「…だろうが…だろうが」「…じゃあるまいし」のように、慣用的表現としての推量形式の使用例は集計にふくめていない。

- 2 注1にも示したが、他の具体的な発話を引用したものは調査対象から除外している。この「引用節内」にふくまれるのは「…と思う」「…と気がつく」などの補文に生じた例である。
- 3 動詞に接続した例にかぎられるが、江戸期の推量形式ウ・ダロウについては、その前接形式・後接形式を詳細にまとめた鶴橋 (2013) の調査もある。鶴橋 (2013:33-36,58-61,114-116) の調査結果について、引用のトが後接した例を「引用節内」、接続助詞が後接した例を「C類従属節内」、それ以外を「文末」と置き換えて整理したのが表8である。調査対象が動詞述語に限定されている点、ウ・ダロウ以外の推量形式をふくまない点などで筆者と手法は異なるが、非文末での生起割合は3~4割程度である。筆者の調査結果と単純には比べられないが、現代の作品にくらべ、推量形式が非文末に生起する割合は高いといえそうに思う。

表8 江戸期の動詞接続のウ・ダロウの生起環境 (鶴橋2013をもとに筆者作成)

	洒落本 1770~1801年		洒落本 1801~1837年		咄本1772 ~1885年	
	ウ	ダロウ	ウ	ダロウ	ウ	ダロウ
文末	160	160	122	142	284	305
引用節内	26	17	35	25	61	42
C類従属節内	72	17	94	25	166	42
非文末の生起割合	29.2%		40.4%		34.6%	

鶴橋(2013)が「終止用法」でも「接続用法」でもない「その他」と分類した少数の例はこの集計から除いている。

- 4 注3と同様、鶴橋 (2013:33-36,58-61,70,156-157) の調査結果をもとに、江戸期の洒落本のウ・ダロウ、人情本のダロウについて、文末に生じた場合の終助詞の後接状況をまとめたのが表9である。筆者の調査と同様に、江戸期の推量形式がA類・B類をふくめた多くの終助詞を後接させているのを確認できる。

表9 文末に生じた推量形式に後接する終助詞の変化 (鶴橋2013をもとに筆者作成)

	洒落本 (1770-1837)		人情本 (1832-1841)
	ウ	ダロウ	ダロウ
終助詞なし	139 (49.5%)	247 (81.8%)	58 (58.6%)
A類終助詞後接	20 (7.1%)	8 (2.6%)	7 (7.1%)
B類終助詞後接	8 (2.8%)	1 (0.3%)	5 (5.1%)
C類終助詞後接	16 (5.7%)	40 (13.2%)	21 (21.2%)
終助詞カ後接	90 (32.0%)	3 (1.0%)	4 (4.0%)
他の終助詞が後接	8 (2.8%)	3 (1.0%)	4 (4.0%)
計	281	302	99

洒落本については動詞に接続した例のみ。人情本については動詞・形容詞に接続した例で、鶴橋 (2013) はダロウ/ノダロウを区別して集計しているが、本稿では同じダロウとしてまとめた。また、筆者の調査にあわせ、ジャンナイカを「他の終助詞」にふくめている。

- 5 例外は向田邦子『寺内貫太郎一家』にある終助詞ヤの後接したダロヤという形3例のみ。
- 6 基本的に主文末と見なしうる述語が出てくるごとにそれを1つの発話文として数えた。このほか、中途終了による発話も1発話文としてカウントしたが、下の例 (a) のように前の文の主文末以外を繰り返している場合、(b) のように倒置文として解釈可能な場合については下線部を中途終了の発話とはみなさず、前の発話とあわせて1発話文としてカウントした。

(a) それが惜しんだよ。 それが。 (作例)

(b) 待っている。 すぐに戻ってくるから。 (作例)

- また、感動詞による一語文も1発話文としてカウントしていない。同じ作者の複数の作品をまとめてあつかっている場合、白岩 (2015:56) の表2で先に挙げた作品から順に1000の発話文をカウントした。
- 7 なお、メイナード (1992:120) は、主に東京出身で20代前半 (1985年の調査時) の男女20組40名による談話において、総計1244発話文中、文末における「[「じゃない」「でしょ(う)」などの助動詞]の使用数が121例であったことを示している。これを1000発話文あたりに直せば約97例となり、表5に示す現代小説の会話文とおおよそ同じ頻度になる。